The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「王充の命」研究史
Author(s)	藤居, 岳人
Citation	中国研究集刊. 1989, 8, p. 10-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61169
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「王充の命」研究史

藤居岳人

王充の『論衡』は多種多様な内容を含んだ書物であるが、その中でも特に〈命〉に言及する諸篇〈命禄篇・命義篇等〉は重要な哲学的問題を有しており、その〈命〉についての議論を諸研究では命定論あるいは運命論と称して考察を進めている。王充の〈命〉論を命定論あるいは運命論と名付けることの成否は重要な問題であると考えるが、ここではその問題には触れず、その呼称を一応認めておく。本稿ではひとまず、その王充の〈命〉論の内容に関する研究に絞って、諸論考を概観してゆくこととする。

『論衡』中には、貴賤貧富の命・強弱寿夭の命・国命・人命等の何種類もの〈命〉が登場する。そして、それらの〈命〉が相互に関係しあって様々な社会事象に影響を与える。そのようなわけで〈命〉相互の関係に言及する論考は多い。しかし、その関係が諸論考間において微妙に食い違いを見せている。また、王充の〈命〉論を必然論として見る論考が多いが、周知の通り、逢遇篇・累害篇等において王充は偶然論を展開している。この必然論と偶然論との関係の理解にも諸論考に相違が見られる。そこで上記の二点を中心として先行論考を概観し、問題の所在を明らかにする。そして、更に王充の〈命〉論の思想史的意義についても各論考を概観してゆく。

(一) 種々の〈命〉

何種類もの〈命〉について言及する論考の中で代表的なものは次の三論考である。森三樹三郎『上古より漢代に至る性命観の展開』（創文社・一九七一年）・佐藤匡玄『論衡の研究』（創文社・一九八一年）・戸川芳郎「王充命定論試探」『中国の文化と社会』第九輯（京都大学支那哲学史研究室編輯・一九六二年）である。そして、それらの論考中において見解の分かれる〈命〉は次の四種の〈命〉である。死生寿夭の命（人間の寿命に関する〈命〉）・貴賤貧富の命（社会的事象に関する〈命〉）・所当触値の命（当然出会うべき〈命〉）・強弱寿夭の命（身体の強弱・寿命の長短に関する命）。これらの〈命〉

の相互関係をどのように考察しているのだろうか。

まず森論考では、死生寿夭の命と強弱寿夭の命とを同一の〈命〉とみなし、それに貴賤貧富の命を加えた三種の〈命〉を人間に内在する〈命〉とする。それに対して所当触値の命は、人間に先天的に定められてはいるものの、その現われとしては外来的であって別の範疇の〈命〉であるとしている。

佐藤論考では、死生に関する〈命〉として外来的な所当触値の命と人間に内在する強弱寿夭の命とを挙げ、それに社会に関する命として貴賤貧富の命を対立させている。佐藤論考のこの〈命〉の類型は林正基「王充の自然的世界観」（『集刊東洋学』五十九・一九八八年）で同様の類型が為されており、また、中国の論考では関鋒『王充哲学思想研究』上海人民出版社・一九五六年）・蔣祖怡『王充巻』（中州書画社・一九七八年）等も同様の類型であり、かなり多数の論考でこの類型が認められているようである。

一方、戸川論考では人間の生理的肉体的生命の支配力として寿命（強弱寿夭の命）を挙げ、人間の社会的政治的関係の支配力として禄命（貴賤貧富の命）を挙げている。更に禄命を補う〈命〉として所当触値の命（吉凶禍福の命）を捉えている。以上の諸説を整理すると次のようになる。

森説
- 所当触値の命
- 強弱寿夭の命（死生寿夭の命）
- 貴賤貧富の命

佐藤説
- 死生寿夭の命
  - 所当触値の命
  - 強弱寿夭の命
- 貴賤貧富の命

戸川説
- 寿命（強弱寿夭の命）
- 禄命（貴賤貧富の命）――所当触値の命

以上のように〈命〉の類型が分かれるのは、各論考によって類型の基準が異なっているためであろう。例えば、森論考では人間に内在しているか、それとも〈命〉の働きが外来的かという基準であり、佐藤論考では死生に関する〈命〉であるか、社会事象に関する〈命〉であるかという基準であるが如くである。判断基準が異なっておれば、その類型も異なってくるのは当然であるが、王充の説く〈命〉はそれぞれの〈命〉の中にまた様々の性格を併せ持っていると考えられるので、各論考が或る一面でのみ〈命〉を捉えるのは適当ではないだろう。

更に類型の相違の原因として『論衡』各篇によって〈命〉の呼称が若干異なっていることも挙げられる。呼称が似ていながら全く違った物を指す場合として、例えば〈禄〉と〈禄命〉との関係がそうである。森論考において〈禄〉は「〈命〉の盛衰の周期を指すものであり、〈命〉の様態を指す概念である。」と規定されている。それに対し、佐藤論考や戸川論考においては、〈禄〉を〈禄命〉と同一のものとしてみる考えのようであ

る。このような相違がなぜ生じたのだろうか。私の考えでは、〈禄〉については『論衡』中の篇毎に指す内容が違っているのではないかということである。すなわち、命義篇における〈禄〉は貴賤貧富の命（禄命）の盛衰の周期を指すものと思われる。しかし、命禄篇での（禄）は貴賤貧富の命の中で貧富を支配するもののようである。整理すると以下の如くになるであろう。

命義篇
　禄（貴賤貧富の命の周期）
命禄篇
　貴賤貧富の命┬─禄（富貴を支配する）
　　└─命（貴賤を支配する）

このように命義篇・命禄篇において言及される〈禄〉の概念が異なっていることから、研究者において見解の相違が生じたと考えられる。

㈡　偶然と必然と

王充の〈命〉論を必然論と解して諸研究が為されていることは前述の通りだが、その必然論と、逢遇篇等で言及されている偶然論とは一体どのような関係があるのだろうか。更にそのキーワードとして〈自然〉が持ち出されてきており、その三者の関係がまた各論考によって異なりを見せているようである。

まず必然と偶然との関係についてであるが、一応、必然と偶然とを別の概念と見る方向と、王充の思考の中では必然と偶然とが同じ概念として認識されており、更には〈自然〉までもが同一視されていると考える方向との二種の流れがある。

前引の佐藤論考では社会現象を偶然性を持ったものと解し、その現象の背後にあって一切の偶然を支配する根源的な必然の理法として〈命〉を捉えている。戸川論考も同様の論旨である。更に重沢俊郎『中国における批判哲学の成立』（大東文化研究所東洋学術論叢・一九五七年）においても、経験の範囲に止る限り偶然性の支配が認識されるが、王充の哲学的要請から世界の諸現象に必然の原理による根源的秩序が与えられたとして同様の論旨を展開している。また、前引の林論考においても、王充は必然的世界の他に偶然というもう一つの世界を認め、その二つの世界は矛盾関係にあるのではなく、表裏一体の相補う関係であるとしている。

以上の各論考は、多少の差はあるものの偶然と必然との二つの世界を認める立場のものであった。また、最近の中国の論考を見ると、金春峰『漢代思想史』（中国社会科学出版社・一九八五年）では、王充は命定論の解決しがたい矛盾に対して偶然性の範疇を提出して宿命論の絶対的必然性を修正しようとしたが、結局は必然と偶然との形而上学的決裂を招き神秘主義に陥ってしまったと説く。この論考も、一応、必然と偶然とを別の概念とみるものであろう。

それに対して、必然と偶然とを同一視する立場の論考としては侯外廬等『中国思想通史』第二巻（人民出版社・一九五七年）

が挙げられる。そこでは王充の命定論の矛盾として偶然性に必然性の役割をさせていたことを指摘しながら、王充自身の思考の中においては矛盾と意識されていなかったと説く。つまり、王充の中では「偶然性が一切を決定する」という命題は「必然性が一切を決定する」という命題であり、また「自然性が一切を決定する」という命題でもあったのだといい、偶然と必然とだけではなく〈自然〉をも王充は同一視していたと見ているようである。また、エンゲルスの批判（『自然の弁証法』「弁証法a。弁証法の一般的問題、弁証法の根本原則」大月書店・マルクス・エンゲルス全集第二十巻）を引いて、このような命定論に対して「偶然性が必然性から説明されているのではなく、むしろ必然性の方が単なる偶然的なものを生みだす母体にまで引きおろされているのである。」と説き、必然と偶然との低次の結合を指摘している。馮友蘭『中国哲学史新編』第三巻（人民出版社・一九八五年）も同様にエンゲルスの説を引いて命定論を批判している。また日本の論考では、例えば、吉田照子「『論衡』における「命」の性格」（『福岡女子短大紀要』十五・一九七八年）が「王充においては、必然性が即座に自然性でありまた偶然性なのであって、三者は同一なものとみなされている。」と説き、必然・偶然・自然を完全に同一とみなす。これは侯氏らと同じ論旨である。

さて、偶然と必然とに関して二種の見方を概観したが、一つ言えることは、どの論考も偶然・必然あるいは〈自然〉の語義がややあいまいだということである。特に〈自然〉については自ら然るもの、すなわち無目的・無意志であることを示す概念として捉えている。しかしながら、戸川論考では〈自然〉を盲目的必然性（偶然的自然性）として捉えており、この説明を見ただけでは〈自然〉は偶然とも必然とも見ることができるようである。また、馮友蘭『中国哲学史新編』などでは「自然界的規律」「自然現象」等の語を多用しており、〈自然〉をある規律を持った概念として捉えているようである。このように語義の捉え方が論者によって違っておれば議論がかみ合わないのは当然である。してみれば王充の〈命〉論の性格を述べる場合、まず偶然・必然や〈自然〉の語義の規定から論を始めることが必要であるといえよう。

あいまいである。例えば、森論考や佐藤論考等では〈自然〉を

㈢ 王充〈命〉論の思想史的意義

以上、王充の説く〈命〉の語義あるいは〈命〉論自体の性格といったことに注目して先行論考を概観したが、最後に〈命〉論の思想史的意義について先行論考を概観し、併せて今後の研究の展望を探っていく。

〈命〉論の思想史的意義について様々な評価が為されている中で、これも二種の流れが見られる。一つは〈命〉論を積極的に評価しようとする立場、もう一つは王充の思想の中で〈命〉論を弱点であるとして批判する立場である。

まず前者の立場に立つ論考として、日本のものが挙げられる。戸川論考では、命定論を基とした王充の批判によって、後漢の宗教的国家において支配思想であった天人相関説に重大な原理上の欠陥があることが暴露されたとする。また、森論考では王充の〈命〉論を孔孟の旧に復するものとし、漢代儒家思想の歪みを正して、本来の儒家精神を純粋化し徹底させたとした。それと同時に、人為の限界を説く儒家精神の悲劇性を明るみに出したという。また、前述の吉田論考も森論考と同じく、王充も基本的に伝統的儒家の人為の限界を説く立場と一致するとしている。しかし、王充は人為を否定することはせず、人の主体性を重視しているといい、森論考に比べて積極的な評価となっている。森論考と吉田論考とは、孔孟の〈命〉思想を積極的に評価するかしないかの違いはあるものの、その基本的主張には啓発されるものが多い。佐藤論考では〈命〉思想を原始儒家（孔子・孟子等）だけではなく、伝統的中国思想一般に共通した基本的思惟であるとした。その上で、王充が〈命〉思想を体系的思想にまで発展せしめたことを評価している。

次に後者の立場に立つものは中国の論考である。周知の通り、中国では王充は唯物論者として高く評価されているが、命定論に関してその評価は一様に低い。侯外廬等『中国思想通史』では、命定論は王充の思想体系の中で最大の弱点であるという。金春峰『漢代思想史』では、命定論は唯心論的神学目的論に反対することから出てきたが、実質上は神秘主義的宿命論に陥ったと説く。関鋒『王充哲学思想研究』・馮友蘭『中国哲学史新編』・蔣祖怡『王充巻』などもほぼ同様に、唯物論者王充の思想の中にあって命定論は弱点であるとして批判している。しかし、〈命〉論に対するこれらの評価は、やはり唯物論にこだわった批判であり、一面的評価であると思われる。しかも『論衡』中に言及される種々の〈命〉を単にひとつの〈命〉という概念でひっくるめて評価を下しているわけで分析不足の感は否めない。その点からすると金春峰『漢代思想史』において「王充は最後に命禄・幸偶などの何種類かの要素の排列組合論によって命定論あるいは幸偶論の避けがたい矛盾を克服しようとした。」とあることは、種々の〈命〉を認めて評価しようとする意図が見られ、従来の中国の論考とはやや違った方向性を見出だすことができる。しかし、これもまだ充分なものではない。やはり王充の〈命〉論については、前述のように彼の説く種々の〈命〉をひとつひとつ検討することから始めねばならず、それによって〈命〉論全体の評価をするべきであろうと考える。